

阿波國 すきま 漫遊記

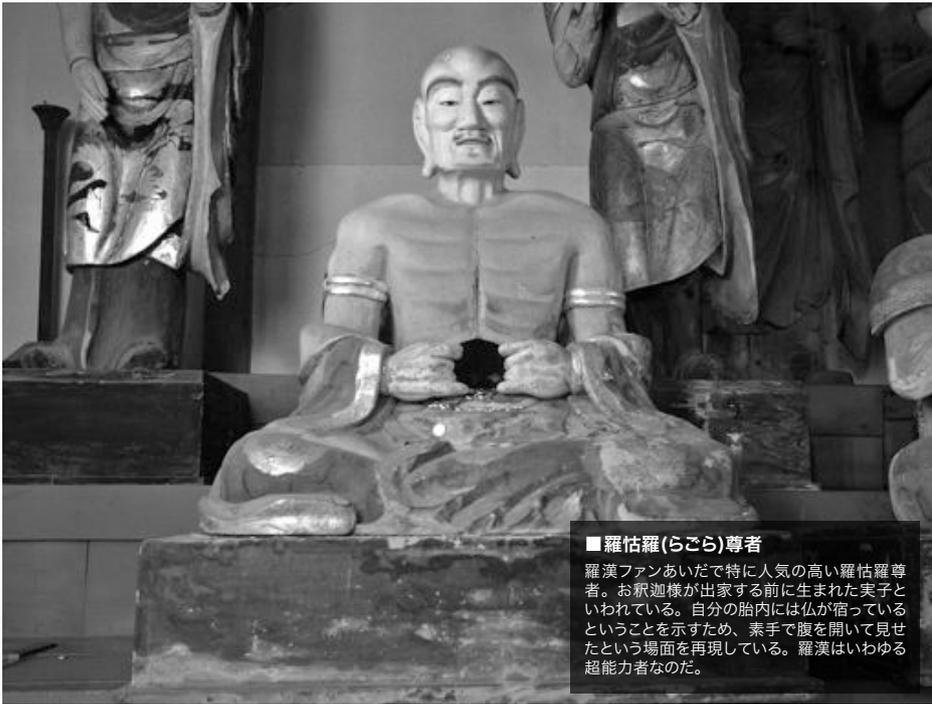
VOL.17 地蔵寺・五百羅漢堂

[取材・文・写真] 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開発・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 <http://www.sukima.com>

■羅漢羅(らごら)尊者

羅漢ファンあいだで特に人気の高い羅怛羅尊者。お釈迦様が出家する前に生まれた実子といわれている。自分の胎内には仏が宿っていることを示すため、素手で腹を開いて見せたという場面を再現している。羅漢はいわゆる超能力者なのだ。



巡礼堂

私はお寺や神社を見るのが好きで、はつきりと数えたことはないがこれまで2千箇所くらいのお寺を訪れていると思う。お寺には修行の場として厳粛なお寺もあるし、楽しみながら仏教に触れあえるようなお寺もある。後者の「楽しみながら」というにはいくつかのバリエーションがある。その一つに建物内部が迷路状になっている寺というのがある。その究極の形態は、関東から東北にかけて分布する「さざえ堂」という形式の建物で、3階建ての建物の内部が通路と多くの階段で仕切っており、順路に沿って仏像を拝観していくと、一度も同じ場所を通らずに建物内すべてを巡れるという不思議な建物だ。さざえ堂のように、人が室内で移動しながら仏像を拝む仕組みの建物を「巡礼堂」という。

巡礼堂には大別して2つの系統がある。一つはさざえ堂で、内部には百観音が納められている。もう一つが、今回紹介する五百羅漢堂である。いずれも発祥の地は、江戸の本所にあった「羅漢寺」で、この境内にさざえ堂と五百羅漢堂が両方建っていたのである。現在、全国に残る巡礼堂は、本所羅漢寺を模して作られたものだと考えられる。

現存する巡礼堂の分布をみると、さざえ堂の分布は関東以北に限られている。一方の五百羅漢堂は関東から西に分布のみで見ている。五百羅漢堂が西にしかないのは偶然なのか、なにか理由があるのかはわかっていない。関東では巡礼堂というと観音霊場巡りが盛んなので、さざえ堂が関東以北に作られるのは理解しやすいが、関西では羅漢信仰が盛んかというところとも思えないからである。

前置きが長くなってしまったが、今回紹介する地蔵寺・五百羅漢堂について、仏教建築史上で特別な位置づけにある建物だということをもっと知ってほしいだったのである。

地蔵寺・五百羅漢堂

地蔵寺は四国霊場の5番札所の寺で、五百羅漢堂はその奥の院にあたる。

本堂から少し離れているため、五百羅漢堂のほうまで行かないお遍路さんも多い。五百羅漢をまつるのは、黄檗宗(禪宗のしきたりだということもお遍路の対象にならない理由かもしれない)。現在の五百羅漢堂は大正4年の再建で、その以前の堂は安永4年の築だったという。江戸に五百羅漢堂が建てられてから50年後にできたことになる。古絵図などをみると、建物の規模や構造は現在と同じだったようだ。



▲巡礼路への入口

弥勒堂の中に五百羅漢の巡礼路への入口がはっきりと口をあけている。これまで巡礼堂をいくつも見てきたが、入口の前に立つときはワクワクする。



▲巡礼路の様子

巡礼路は暗い。羅漢は片側のひな壇に並んでいる。提灯の明かりに浮かび上がる像は少し不気味だ。子供のごころこが怖かったと言う人も多い。



▲通路が曲がっているところ

羅漢堂の内部の通路は「コの字」型になっている。順路は途中で2箇所折れ曲がっていて、進行方向が見通せないようになっているのだ。これぞ、巡礼堂の真骨頂。

とはいえ人間なのだ。それゆえ、たいしては親しみやすい造形をしている。五百羅漢をまつっている所では、探すと肉親に似た像が見つかるという伝えられているのはそのためだろう。また巡礼堂に限らず、五百羅漢をまつる寺は面白い寺である傾向が強い。覚えておくことが楽しくなるかもしれない。



▲個性的な造形

「ウチの近所にこういうヤサしいよw」などと思ってしまう人間くさい造形。仏像の親善という専門知識がある場合が多いが、羅漢観音は気軽に楽しもう。



▲釈迦如来三尊仏

全行程の中間のところに大仏殿があり、釈迦如来がまつられている。釈迦の左右には文殊菩薩、普賢菩薩の脇侍も置かれている。この飾り方を釈迦三尊仏という。



▲大師堂

巡礼路の最後には弘法大師をまつる大師堂に出る。入口のあった弥勒堂からは180度回転した位置になる。大師堂の内部にも別の通路がある。



▲ミニ八十八箇所

大師堂の弘法大師の廻りの通路では、四国八十八箇所のミニ巡礼ができるようになっている。この通路の感じ、巡礼堂マニアにはたまらない構図だ。

羅漢とはお釈迦さまの直接の弟子たちのことである。如来や菩薩のようないわゆる仏さまではなく、悟りを開いた